

XenosagaI・II - 第十四話 追憶 - Erinnerung -

アレン： みなさん、モモちゃんの深層意識内はかなり不安定な状態だと推測されます。
どんな危険があるかわかりませんから、しっかり準備してください。
それじゃあ、始めますよ。

ケイオス： シオン、お兄さんに挨拶は？ ちゃんと言ってきた？

シオン： いいの、昨日の今日だし、顔あわすと何いっちゃうかわからないから。
――それに、モモちゃんを助けて、必ず帰ってくる。
だから、話す時間はこれからたくさんあるわ。

ケイオス： そうか、そうだね――

アレン： では、ダイブを開始します。ダイブ被験者は主任、Jr. くん、ケイオスくん、ジギーさんの四人。
ダイブターゲットは、サクラ・ミズラヒの記憶を構造モデルとした、モモ・ミズラヒの深層領域。
KOS-MOS へのダイブ時と同様に、近接する空間及び時間軸を共有した者の記憶を共鳴再生する可能性があります。

Jr.： ――この場合、それは俺だ。

シオン： Jr. くん――

ジギー： サクラ・ミズラヒは、中枢神経系の器質障害を患っていたとミズラヒ博士から聞いたが――
彼女と接した経験があるのか？

Jr.： ――あるぜ。

サクラの症状は、U.M.N. に潜在する波動異常となんらかの接点を持つと考えられていた。
だから、その治療は――俺たち U.R.T.V. の U.M.N. 連結訓練を兼ねて、
惑星ザバロフのユーリエフ・インスティテュートで行われたんだ――

シオン： モモちゃんの元型である、サクラちゃんと――

ジギー： ――そろそろ聞かせてもらいたい。幾度も話には聞いているが、そもそも、ウ・ドゥとはなんなのだ。
おまえたち U.R.T.V. は、なぜ、対ウ・ドゥ用に生み出されたのだ？

Jr.： ウーヌス・ムンドゥス・ドライブオペレーション・システム――

名前を聞く分には、U.M.N. の制御 A.I. のような響きだがあれば人間の手によるモノじゃない。

シオン： そう、違うーA.I. なんかじゃない。そんな単純なものに、あんな局所事象変移を起こせるはずがない。

Jr.： そうだ。ただの口当たりの良い名前に、俺たちも、最初はだまされていた。

U.M.N. 上に潜在する、危険な波動を帯びた人工意識体だって信じてなー

ー嘘っぱちさ。俺たちの父、ディミトリ・ユーリエフは、なにもかも知ってやがった。

ルベド： よし、精神連鎖[リンク]展開ー全U.R.T.V.、固有波を俺にあわせろ！

アルベド： うー

ルベド： ーん？ おい、来るぞ、ウ・ドゥの波動だ！

アルベド： ーひっ、ルベド、怖いよ！ 手を離さないで！

ルベド： 集中しろ、アルベド！ 押し返すんだー訓練どおりにやれば間違いはない！

ーっ！

いま見えたのはー

なんてこったー

ニグRED： ルベド、どうしたの！

ルベド： ー緊急回避！ 精神連鎖[リンク]閉鎖だ！！

ニグRED： ーえ！？

ルベド： 精神波動とはいえ、力学的には、反存在衝突の一種だ。俺たちは、ウ・ドゥとともに消滅する。

親父めー全部、知ってやがったんだ！

ニグRED： もう連結[リンク]は完成してる、止まらないよ！

アルベド： イヤだよ、ルベドー離さないで！

ルベド： ダメだ、遮断する！

アルベド： 離さないでールベドオオオッ！

U.R.T.V.： ああああー

U.R.T.V.： ぐあああああああっー

アルベド： うわああああっー

ジギー： ウ・ドゥ、その実体はー

Jr.： 反存在である俺たちU.R.T.V.ですら、正確な正体は知らされていなかった。

ヒトの手で御する事など無謀な、上位領域のエネルギーーそういう存在だ。

アレン： あの、みなさんーエンセフェロン構築、完了しました。

非局所的連結[インターコネクション]いつでも開始できます。

Jr.： すまねえ、始めてくれ。

シオン： バックアップよろしくね、アレンくん。

アレン：この仕事にかけては、僕はプロですからね。みなさん、安心して行って来てください。

インターフェイスインターコネクション、接続準備開始。

シオン：うんー頼りにしてる、アレンくん。

アレン：帯域確保、ケージパーティションを開放ーシステムモニタリング、正常。

ダイレクトアプローチ、準備すべてOKです。

Jr.：よし、行くぞー

追 - Erinnerung - 憶

ジギー：ここはー

Jr.：モモの深層領域に潜在する、サクラの内的世界だ。旧ミルチアの生家を再現したらしい。

モモーーー？

モモ、無事だったのか！

モモ：ーーーーー

Jr.：聞こえないのかーモモ、返事しろよー

シオン：無駄よ、Jr. くん。彼女は返事をしないわ。ううん、できないの。

Jr.：なんでだよ、ちゃんとここにいるじゃないか。

シオン：彼女はいま、人格層を停止した状態、しかも、神経ネットワークが分断されてるのよ。

なにも理解することができない、こちらからの問いかけも聞こえてるかどうかー

Jr.：そんなーくそー

シオン：ここにいるモモちゃんは、あくまで、彼女の無意識上の産物。

たとえなんらかの行動を起こしたとしても、それは条件反射的に行動しているだけー

モモちゃん、こんな状態でも一生懸命、私たちを助けようとしてるんだわー

Jr.：くーモモー

ジギー：なにをしている。時間がないのだろう、モモの行動を無駄にするな。

Jr.：わかってるー

モモ、一緒に行こう。必ずーアルベドのトラップ、なんとかしてやるからな。

モモ：――――

シオン：あれはーモモちゃん？

ジギー：いや、違うな。

Jr.：ーサクラだよ。

???：ルベドーま、真っ暗だよ。

???：なんか狭いなー

???：わかってるよ、ちょっと黙ってろ。

???：ねえ、怖いよ。灯りつけてよ。

???：やめろよ、そんなに動くなってーいてっ。

???：わ、押すなって！

???：うわあー

ルベド：痛うー

ニグレド：なんだ、ここー

アルベド：設置座標ー間違えてる？

ルベド：アルベド、さっき足踏んだろう。

アルベド：ええ、し、知らないよー

シオン：この子たちー！

Jr.：そうーこれは。十四年前の俺たちだよ。

ジギー：我々が見えていないのか？

Jr.：そうらしいなー

ニグレド：どうも座標は合ってるみたいだ。つまり、あの女の子が僕らの接触対象だよ。

アルベド：あの子、こっち見てるー

ルベド：うわあ、ご、ごめんなさい！

サクラ・ミズラヒ：あなたたちー

ルベド：今度は玄関から来るよ！

サクラ・ミズラヒ：待って！

あなたたち――私の言葉、聴こえるの？

ルベド：あ、ああ――

サクラ・ミズラヒ：嬉しい――あなたたちが来てくれて――

アルベド：（ニグレド、どうしよう）

ニグレド：（ど、どうしようって――）

ルベド：おい、泣くなよ。俺たち、どこへも行かないからさ。

シオン：こうして、Jr. くんはサクラちゃんと知り合ったのね――

Jr.：――

ケイオス：Jr.――

Jr.：あ、悪い。まさか――この時間軸に居合わせるとは思ってたから――

とすると、次に行くべきは、あそこか――

シオン：あてがあるの？

Jr.：あるぜ。ユーリエフ・インスティテュート、俺たちが生まれ育った場所さ。

ユーリエフ・インスティテュート

ジギー：あれは――ユリ・ミズラヒ博士か。

シオン：じゃあ、隣にいるのは――

Jr.：クソ親父――

シオン：あれが、ディミトリ・ユーリエフ――

ユリ・ミズラヒ：――ディミトリ、本当に、あの少年たちがサクラの治療に役立つと――？

ユーリエフ：君の娘さんが抱えているのは単なる器質疾患ではない。

反ウ・ドゥ波動を有する U. R. T. V. との接触は、有益だと思うよ。

ユリ・ミズラヒ：U. M. N. の共時性に対する感受性過敏――

狭い宇宙の時代には存在しなかった疾患だわ。

オペレーター：U. M. N. ダイブミッション、フェーズ 6 終了。

U. R. T. V. 部隊 No. 660 から、順次、ダイブアウト開始。

ーダイブポッド開放します。

ルベド：ーっ、げほっ、げほげほー

ユリ・ミズラヒ：――――

ルベド：あの子がーあの女の子が、言ってた。

ユリ・ミズラヒ：――――！

ルベド：ママを大好きだーって。

いつでもママを愛してるーって、そう伝えてくれってー

えっとー去年の誕生日に、貝殻の宝石箱をもらったーって。

そう言えば、ママには通じるからーって。

ユーリエフ：ほう、波長が合ったか。

ユリ・ミズラヒ：サクラと話せたーの？

あなた、名前はー？

ルベド：ールベド。あ、じゃなくてー

U.R.T.V. 個体ナンバー 666ーです。

ユリ・ミズラヒ：ルベドー

これからも、あの子の言葉を私に伝えて。ーお願い。

ルベド：はいーはい！

シオン：お母さんーか。

なんだか、時間が停滞しているような、不思議な感覚の世界ね。やっぱり、私たちが見えてないみたい。

Jr.：ここはサクラが生きていた頃のままだ、時間が止まってるんだ。

けど、何故この場所なんだーどうやったら、モモを助けられるんだー

ジギー：どうやら、あの三人組の幻影が鍵のようだな。まるで、我々をどこかへ誘っているように見える。

シオン：そうね、当てもなくうろつく時間はないわ。あの三人を捜しましょう。

ミズラヒ家

ユリ・ミズラヒ：そう、上手よ、サクラー――

サクラ・ミズラヒ：――――

ルベド：サクラー本当に、現実世界[こっち]ではしゃべれないんだな。

ユリ・ミズラヒ：——ええ。外界を認識し、内面を表出させる脳の回路網が寸断されているの。

電位パルスの制御が不安定だと診断されたものの——

薬品投与も、ナノマシンによるグリア補助も効果を表さなかった。

ルベド：——おかしいな。ナノマシンで膜電位を補正しても効果が上がらないなんて。

ユリ・ミズラヒ：そうね。でも、いまは貴方の持つ波動——固有波長が、

サクラの欠損部分を埋め合わせてくれている。

Jr.：———

サクラ・ミズラヒ：ミルチアに残ったパパも治療の研究をしているみたい。

とても人間に近いレアリエンを作って、私の感覚を常にインターリンクできるようにするんだって。

それがうまくいけば、もう、ママを悲しませずにすむ——

ルベド：ふーん。いい両親だな、サクラんちは。

サクラ・ミズラヒ：ずっと一緒にいてくれたら、もっといい両親だったのに——

ルベド：ん？ なにか言ったか？

サクラ・ミズラヒ：ううん——ルベドは？ お父さんはユーリエフ博士でしょ、お母さんはいないの？

ルベド：いるさ、遺伝的な意味では。傷一つない染色体を持った健康な卵子。俺たちが知っているのは、それだけ——

サクラ・ミズラヒ：捜さないの？

会いたくない？

ルベド：会って、どうするんだよ——

貴女[あなた]は遺伝子操作された生体兵器の生みの親です——って言うのか？

サクラ・ミズラヒ：そんな言い方、しないで。ルベドは素敵な男の子だよ。

兵器なんかじゃない。

ルベド：違うもんか——

俺たちがインスティテュートの外に出られるのは、戦争が起こるときだけだ。

Jr.：———

シオン：不思議ね——

現実起きた過去のできごとと、接触実験で生まれた心の交流が、等価値に見えている——

Jr.： 不思議でもなんでもないさ。

シオン： Jr. くん――

Jr.： このエンセフェロンは、特定の人間の記憶を再構成してるんだからな。

シオン： そう、そうよね――記憶のなかでは、現実を起こったできごと、
仮想空間で体験したことにも、違いはない――じゃあ、特定の人間ってやっぱり――

Jr.： ああ、さっきも言った通り――俺の記憶だ。

すべて、俺の記憶が時系列に沿って再構成されてるのさ！

ケイオス： Jr.、だとしたら――

Jr.： ああ、俺はもうすぐ――いちばん思い出したくない、あの時間を――
もう一度、見せつけられるんだ――

サクラ・ミズラヒ： あのね、ルベド。お願いがあるんだけど――

もうすぐ”妹”が生まれるの。ママから産まれるんじゃないかって、ちょっと違う感じの妹なんだけど――

その”妹”とママを、わたしの代わりに、護って欲しいの。

ルベド： いいよ、おまえの妹なら俺の妹だと思って、面倒見るよ。

サクラ・ミズラヒ： 約束だよ。

ルベド： ――おう、まかしとけ――

あ――――

サクラ・ミズラヒ： ―――――

ルベド： ―――――

サクラ・ミズラヒ： おやすみ、ルベド。また明日ね。

ユーリエフ・インスティテュート 中庭

アルベド： ――あれ、そのハーモニカ、どうしたの？

ルベド： ――ん、ああ、ちょっとピアノにあわせて吹いてみようかって――
訓練の一環だよ。

ニグレド： ふうん――そんなにあの娘[こ]が気になるんならずっと仮想空間にいたらどう？
きっと喜ぶと思うよ。

ルベド： そんなじゃねえって！

アルベド： ――最近のルベド、集中力が落ちてる。ウ・ドゥ・シミュレーターの模擬訓練が控えているのに、おかしいよ。

ルベド：そ、そんなくらい、俺だってわかってるさ。

連結始点[リンクマスター]として、任務[ミッション]はまっとうする。

アルベド：ルベドを信じていいんだよね。ルベドがいれば、ウ・ドゥなんて怖くないんだよね。

ルベド：当たり前だろ。シャンとしろ！

おまえだって、U.R.T.V. 標準体とは桁外れの波動を持つ、変異体なんだから。

アルベド：怖くない——そうだ、ウ・ドゥは怖くない——

ニグレド：———アルベド？

アルベド：うふふ——そうだよ、ウ・ドゥは怖くないんだ。

だって、僕たちはウ・ドゥにアクセスするために、産み出されたんだもの。

ルベド：おい、アルベド——

アルベド：ルベド、ニグレド、ウ・ドゥにアクセスしたら、どんな気持ちなんだろうね——

ふふ——きっと、それは喩えようもなく、素晴らしいことなんじゃないのかな。

自分が自分でなくなり、もう一段階、進化の階段を登っていくような——

うふふふ——

ルベド：アルベド！

ニグレド：ルベド、なにも殴らなくても——

ルベド：いいや、こいつにはしっかり教えといた方がいいんだ。いいか、アルベド。

俺たちはウ・ドゥの反存在なんだ。うかつに引かれあったら、どうなるか——忘れるんじゃない。

アルベド：——う、うん、ごめん。ルベド——忘れ、ないよ。

???：あらあら、とんだ醜態をさらしているものね。

アルベド：あれは——？

ルベド：なんだよ、お前——

???：はじめまして、666 ルベド、667 アルベド——わたしは U.R.T.V. 668。

ニグレド：668——欠番じゃなかったのか。

???：あなたが、669 ニグレドね。会ってみたいと思っていたわ。シトリンと呼んで。

ニグレド：あ、ああ、よろしく——

（なんだ？ なぜ、僕にだけ——）

ルベド：女性体って、初めて見た——

シトリン：あら、オリジナルの受精卵は X 株と Y 株の二種、保存されているわ。

わたしは mtDNA を重視した X 型、あなたたち単純な Y 型だけで計画が行き詰ったら、困るでしょ。

アルベド：女子棟があるとは聞いてたけど――欠番は死んだ子なんだと思ってた。

シトリン：たしかに処分された個体も多いわ。あなたたち男性体と違って、もう9体しか生存していないし。

素質では劣らないはずなのに、とても残念よ。

ルベド：処分って――簡単に言うなよ。おまえ、生意気だぞ。

シトリン：あなたも、生意気さではなかなか負けていなくてよ、ルベド。

私たちは普通の子供じゃない。

自らの波動を制御できずに死んでいったとしても、泣き言など許されないのよ。

ニグレド：シトリン――と言ったね。

シトリン：ええ、そうよ。

ニグレド：君の考えは間違っていない。だけど、僕たちのリンクマスターはルベドなんだ。

君に言われるまでもなく、U.R.T.V.の責任も覚悟も、ルベドはわかっているよ。

シトリン：――そう願いたいわ。皮肉に聞こえるかもしれないけど、これは偽らざる私の本心。

――覚えておいて。それじゃあ、ね。

ルベド：あいつ、なんなんだ――

――

アルベド：僕、あいつら嫌いだ。

ニグレド：（しっ、そんなこと、口にするもんじゃ――）

アルベド：だって、見なよ――自分の意思ってものがなくて、全員で一塊の自我なんだぜ。

なんで665番までは、ああなのかな。

ニグレド：標準体は反波動が弱いんだ。でも、そう産まれたのはあいつらのせいじゃない。

アルベド：うう、やだやだ！

ルベド：――なんだよ、お前ら。今日の訓練はもう終了したぞ。はやく解散しろよ。

――うっ。

U.R.T.V.：どうして――

どうして君がリーダーなの？

666――変異体のクセに。

怪物のクセに。

ルベド：――怪物、だと。

U.R.T.V.：その通りじゃないか。

君は怪物じゃないか。

ルベド：あ———

アルベド：やめろおおっ！

ルベド：——アルベド！

アルベド：黙れ、標準体[クズ]ども——ルベドを馬鹿にするな！

U.R.T.V.：ううう——

アルベド：ルベドはなあ！ おまえたちとは！ パワーが桁違いなんだよっ！！

それを！ 貴様らなんかに！ わかってたまるか！

ルベド：やめ、ろ——やめてく、れ——

アルベド：ルベドに手を出すな！ 僕ら変異体が怪物なんじゃない！ おまえたちが役立たずなんだよっ！

ニグレド：殺す気か、アルベド！

アルベド、やめよう！ 彼らは敵じゃない！

アルベド：放せ、ニグレド！ 放してくれよおおお。

放してよ——

ルベド：アルベド——

アルベド：ルベド————ルベドだって、僕を殴った。僕——間違っていないよね。

ルベド：——————

アルベド：ルベド——なんで、そんな目を見るのさ。

ルベド：——————

アルベド：ル、ルベドォッ！

—

アルベド：——なんなの、わざわざ呼び出すなんて。

ルベド：——ナンバー623は重体だそうさ。

アルベド：ん？

なあんだ、そんなこと。心配する必要ないよ。

あんな怪我、すぐ再生すればいいんだ。

ルベド：おまえ、なに言って——

アルベド：なにって——

こうだよ。

ルベド：うわあああっ！
ニグレド：アルベドーッ！
アルベド：――ほらね。
ルベド：馬鹿っ、二度とそんな真似するなっ！
アルベド：ルベド――？
ルベド：死んだら――死んだら、もう生き返らないんだぞっ！
アルベド：そんな――まさか――ルベドたちは再生――しないの？
ルベド：当たり前だっ！
ニグレド：それは――君だけの特殊能力なんだよ。
アルベド：僕だけ――
 二人とも――僕を残して死ぬの――？
 嫌だあああっ！
 一人ぼっちは――ヤダあっ！ ルベドが死んだら、僕も死ぬうっ！！
ルベド：ばっ、馬鹿――縁起悪いこと言うな！
 俺まで悲しくなってきたじゃねーか。
アルベド：ルベド、置いていっちゃ嫌だ――！
ニグレド：――――――

Jr.：あの日から――アルベドは変わっていったんだ。

シオン：――彼はなにをしているの？
Jr.：墓を作ってるのさ。
 ――俺とガイナンの、な。
シオン：――――！
Jr.：自分と違って、俺やガイナンは死んでいく――
 あいつはそのことを、わかってしまったんだ。
 でも、俺たちにはわからなかった。
 死ねない体を持つというのは、どんな気持ちなのか――
 わかりようがなかった。

ジギー：死は魂の休息——そう言ったのは、誰だったかな。

肉体は死なず、精神の負う恐怖だけを積み重ねてゆくとしたら——もはや世界は、永遠の牢獄でしかない。

Jr.：おっさん——

—————

俺とアルベドは、元はひとつだった——

シオン：オリジナルの受精卵が同じ——だから？

Jr.：いいや、文字通りの意味さ。受精後28週まで、背中にくっついてた。

この辺にアイツの心臓がくっついててさ——

シオン：え——

ケイオス：不完全な分裂によって、臓器の一部を共有する双生児——まれに存在するらしいよね。

Jr.：その通り——基本的に、細胞の再生を止めたり促したり——

俺とあいつの特殊能力は、同じ原理で成り立ってる。

切り離されたことで、その方向性は両極へ向かったけどな——

だからこそ、俺はアイツを見放しちゃいけなかったんだ。

シオン：Jr.くん——

もう一度、歩み寄れないのかな。あの人と——

Jr.：シオンも物好きだな。現在[いま]のあいつには、あれだけ散々な目にあわされてるのにさ。

シオン：そう、そうね——それでも、Jr.くんと彼が、また昔のようになれるのなら——

そんなふうに考えちゃうの。——やっぱり、無理？

Jr.：—————

俺もあいつも、ヘソ曲がりだからな——

シオン：——追わないの？

Jr.：——ああ、わかってる。モモを救うためだ。

つらい過去とも、向き合わなくちゃいけないんだよな。

シオン：Jr.くん——

Jr.：——行こう。この次に見るものを、十四年前の俺は耐えられなかった。

でも、いま——俺は乗り越えなくちゃ——ならないんだ。

ユーリエフ：U.R.T.V. 各員に告ぐ――これは演習ではない。

睡眠状態の被験者――その深層領域へ U.M.N. 経由ダイブを行い、知覚障害部分を改善する。

対ウ・ドゥ訓練としても、得るものが大きいミッションだ。

ユリ・ミズラヒ：降下目標は、白い砂浜のある海。この海は、被験者による意識障壁下の主観的イメージです。

そのイメージの中に潜む、神経伝達を阻害しているものを把握、除去していただきたいのです。

ルベド：海――

アルベド：海なんて、見たことない。

ニグレド：そうだね、いつか行こう。

ユリ・ミズラヒ：サクラをお願いね、坊やたち。

ユーリエフ：それでは、ダイブを開始せよ。

オペレーター：個体ナンバー 666、ニューラル・モニタリング開始。膜電位、安定しています。

ナンバー 667、自発脳波周波数 20 から 28 ヘルツ――

ユーリエフ：落ち着け、子供たち――動揺するな。

オペレーター：――8 ヘルツ、安定しました。

ユーリエフ：そうだ、それでいい。

ヘルマー：これが U.R.T.V. か――

ユリ・ミズラヒ：ディミトリ、大丈夫なの？ サクラのためとはいえ、あの子たちを苦しめたくはないわ。

ヘルマー：少年たちとは聞いていたが、これほど幼いとは――

ユーリエフ：軍人が感傷的過ぎるぞ、ヘルマー。

ヘルマー：人の生命を守るのが軍人の務めだと、私は思っている。

ユーリエフ：ならば、あれらが人だという認識をまず捨てることだ。――君もな、ミズラヒ夫人。

ユリ・ミズラヒ：――――――

サクラ深層領域

ルベド：サクラ――ッ！

サクラ・ミズラヒ：ルベド！

ルベド：やっとこの日が来たぜ！ 今日のミッションが無事終了すれば――

サクラは自分で、お母さんと話ができるようになるんだ！

サクラ・ミズラヒ：――うん、そうだね。

ルベド：よっしゃ、まずは海だ！

本物の海へ行く前に、仮想空間だけど海へ行ってみようぜ！

サクラ・ミズラヒ：ルベドーもうちょっとゆっくりー

ルベド：ほらほら、もっと頑張れよ！

アルベド：ルベドー楽しそうだね。

ニグレド：まあ、この日のために、訓練を頑張ってきたようだしね。

アルベド：え！ どうして？ 僕たち、ウ・ドゥと対決するためにー

ニグレド：それは任務だろう。任務以外に戦う理由を見つけたって、悪いことじゃないさ。

さ、僕たちも行こう、アルベド。

アルベド：う、うんー

（僕には任務とルベド以上に大切なものなんて、ないのにー）

シオン：Jr. くんー

Jr.：後を追おう、いまはそれしかない。

ケイオス：大丈夫なんだね、Jr.。

Jr.：ーああ、今度は心の準備もできてるしな。

Jr.：こいつら、なんで俺たちにー

ジギー：悩んでいるひまはない、まずは生き延びることを考えろ！

Jr.：あ、ああー

サクラ・ミズラヒ：ねえ、ルベドーいつかの約束、覚えてる？

ルベド：ああ、もちろん。忘れるわけ、ねえだろ。

サクラ・ミズラヒ：よかったー

ルベド：それにさ、俺ーもうひとつ、約束するよ。

サクラ・ミズラヒ：えー？

ルベド：この海に潜んでるっていう、サクラを苦しめてるモノ、俺が排除してみせる。

そうしたら、サクラもー

サクラ・ミズラヒ：ううん、そんなのどうでもいいの。そんなことより、ルベドがー

―――！

ルベド：どうした、サクラ――？

サクラ・ミズラヒ：いや――いや――

ルベド：あれが――サクラの抱いている恐怖――

ニグレド：危ないっ、うしろっ！

ルベド：くっ！ 面白え、俺の力で――

サクラ・ミズラヒ：やめて――ルベド――あれは、あれは――

アルベド：どうしたの、ルベド？ ――ああっ、あれは！

なんだよ、これ！

ニグレド：みんな気をつけろ！ あれは――

ルベド：ああ、ウ・ドゥの欠片だ！

アルベド：ええっ！

ルベド：標準体は集まれ！ 精神連鎖[リンク]を張って、一気に叩くぞ！

ニグレド：ルベド、みんななにか――変だ！

U.R.T.V.：波動だ――

U.R.T.V.：波動が来る――

ルベド：おい、なにを言って――

U.R.T.V.：いやだああっ

U.R.T.V.：うわぁ――！

アルベド：奴ら――汚染されてる！ ウ・ドゥ・シミュレーター内でもないのに！

サクラ・ミズラヒ：いやああああああっ！

ルベド：サクラ！

ニグレド：くっ――

アルベド：ルベドッ、ニグレドッ！！

シトリン：ニグレド――！

怪我はない、ニグレド！？

ニグレド：あ、ああ、ありがとう。でも、君はなぜ――

シトリン：！ ――また来るわ！

ルベド：アルベド、頼む！ サクラを――

アルベド：で、でも――

ルベド：行ってくれ！

ニグレド：僕たちもすぐ行く！

アルベド：う、うん、必ずだよー！

Jr.：あ、あーー同じだ、あのときとー

シオン：Jr. くん！

ケイオス：Jr. ！

ジギー：忘れるな、これはお前の記憶の再現だ。

過去は変えられないーだが、未来をあきらめるな。

サクラを救えなかったお前が、今度はモモを救うのだ。

Jr.：あ、ああーわかってる。

俺は、もうー

【 戦闘 VS 汚染体 γ 】

ルベド：くそっ、手こずった！

シトリン：はあ、はあ、でもーあなたにしては上出来よ、ルベド。

ニグレド：急ごう、サクラやアルベドが心配だ。

ルベド：ああ！

シオン：私たちも行きましょう！

Jr.：――――

アルベド：あーああー

ルベド：！

サクラッ！

サクラアアアアッ！！

ニグレド：アルベド――

アルベド：ニグレド、ウ・ドゥがーウ・ドゥがー

ニグレド：――――

ルベド：嘘だろ、サクラ―まだ本物の海、見に行っていないぜ―
お母さんに、自分の口で大好きって言ってないぜ―
なのに―
なのに―

シオン：Jr. くん――

Jr.：――――
―――わかってる。俺は、大丈夫さ――

ルベド：サクラァァァッ！

Jr.：（同じことを―繰り返させはしない―
モモ―おまえは、俺が必ず―）

ルベド：うわあああああああっ！